

惜別の抒情

— 『古今和歌集』源実の惜別の歌群と「をり」の表現意図 —

江藤 高志

『古今和歌集』巻第八、別離歌に、筑紫へ湯浴みに旅立つ源実と、彼を見送る白女、藤原兼茂らによる歌群があります。その歌群は、詞書が別れの始まりから最後までを展開させる働きを担っており、「をり」という形式名詞がその別れを締め括る役割を果たしていると考えています。「をり」は、『古今集』以降に使われるようになった語です。本発表は、この「をり」が表現するものを明らかにすることで、兼茂の心情、そしてこの惜別の歌群の結末部の構造を探ることを目的としています。

それでは、最初に源実の惜別の歌群をみてゆきます。資料一枚目、①のアの例を御覧下さい。

① 源実の惜別の歌群

ア.

源実が筑紫へ湯浴みむとてまかりけるときに、山崎にて別れ惜しみける所
にてよめる 白女

命だに心になふものならばなにか別れの悲しからまし

源実が今の北九州である筑紫へ下向する時に、京都の山崎で別れを惜しんだ場所で、遊女と思われる白女が、実^{しろめ}に和歌を詠みます。「命だけでも思い通りになるのならば、どうして別れが悲しいでしょうか」

しかし、一行は、山崎で別れることができずに、山崎の西にあったとされる

神奈備の森まで、見送りに同行します。

山崎より神奈備の森まで送りに人々まかりて、帰りがてにして別れ惜しみ
ければよめる 源実^{さね}
人遣りの道ならなくに大方はいき憂しと言ひていざ帰りなむ

見送られる源実は、見送りに来て帰ることができない人達を慰めるかのよう
に、自身の心情を和歌で明かします。「人に行かされる旅でないのだから、通り
一遍に行くのが辛いと言って、さあ帰ってしまおうか」と、簡単にはかなわな
い帰京への気持ちをほのめかします。しかし、それでも見送りの人々は、帰ろ
うとはしなかったのでしょうか。実が、別れの口火を切り出します。

「今はこれより帰りね」と実がいひけるをりによみける 藤原兼茂^{かねもち}
慕はれて来にし心のみにしあれば帰るさまには道もおほえず

（『古今和歌集』巻第八、別離歌）

実は、「もう今となつては、ここから帰りなさい」と兼茂達に語りかけまし
た。その言葉を聞かされた兼茂は、和歌を詠んで答えます。「あなたを慕う気持
ちだけで来た身ですから、帰るにも道がわかりません」兼茂は、最後の最後まで
で別れたくなかった心情を、実に訴えかけたのです。

従来、この歌群は、悲しみに満ちた別れとみる解釈と、社交的な別れとみる
解釈との二通りの解釈がなされてきました。発表者は、悲しみに満ちた別れの
歌群と解釈しています。その根拠の一つに、「をり」の語の使用が挙げられま
す。この「をり」の表現意図が、兼茂が実の別れの言葉を、どのように受けと
めたかを知る手がかりになると考えられます。そして、『古今集』では他に見ら
れない形式である、三首からなる道行きの歌群として、採録した撰者達の歌群
への理解を明らかにできると考えています。

では、この歌群を悲しみに満ちた別れの歌群と理解する手がかりとして、「をり」以外の四つの根拠を、まず確認しておきたいと思います。

『古今集』の本文は、三証本系統に属する清輔本を用いました。清輔本の本文は、永治二年本を底本とし、他の清輔本（保元二年本、寛親本）で校合し、適宜漢字に直しています。

では、まず根拠の第一点として、イに挙げました山崎の周辺図を御覧下さい。

イ. 山崎の周辺図（『平安時代史事典』資料・索引篇、1997年6月、角川書店）

山崎は、淀川の北岸で、京都から西国への水路の中継地でした。平安時代には、この場所で多くの送別がなされていたことが、歌集などから窺えます。よって、ここは、陸路における見送りの最終地点を意味していました。しかし、一行は、山崎で別れることができずに、神奈備の森まで同行します。このような例は、他に見出し難いことから、彼らの並々成らない別れ難さが表れていると読み取れます¹⁾。

続いて、根拠の第二点として、第一首の白女の歌を御覧下さい。初句の「命だに」の句は、同時時代以前に例が見出し難い表現です。唯一見出されるのが、『萬葉集』にある、狭野弟上娘子さののおとがみをとめの歌です。この歌は、罪によって、越前に配流された夫との贈答で詠まれた歌です。ウの例を御覧下さい。

ウ.

命あらば逢ふこともあらむ我が故にはだな思ひそ命だにへば

（『類聚古集』巻第十二、離別、『萬葉集』巻第十五-三七四五、狭野弟上娘子さののおとがみをとめ）

「命さえあれば再会もあるのですから、私のためにひどく思い患わないで、命さえ長らえれば」と、命によって、再会への望みをつなごうと夫を励ます歌となっています。しかし、白女は、その命でさせも思い通りにならないとして、その発想を否定します。そのように、狭野弟上娘子さののおとがみをとめの歌詞をふまえることで、再会を絶望した別れの悲しみを際立たさせています。

次に、根拠の第三点として、第三首の詞書にある実の詞である「今は」を御

覧下さい。「今は」の言葉には、もうこれから事態が一変して元に戻らない今を意味しています。その一例として、工の例を御覧下さい。

工.

七日の夜の暁によめる 源宗于朝臣^{むねゆき}

今はとて別るときは天の河わたらぬさきに袖ぞひちぬる

(『古今和歌集』巻第四、秋歌上)

『もう今年はお別れ』と別れを告げる時には、天の川を渡らぬ先から彦星の袖は悲しみの涙で濡れていることだ」とあります。歌が詠まれたのは、七月七日の七夕の夜の明け方とありますように、一年一度の再会の日である七日の夜が終わり、八日の朝になろうとした時点で詠まれています。よって、実の話した「今は」には、別れの最後を切り出したことがわかります。

では、源実と兼茂との間柄はどうだったのでしょうか。根拠の第四点として、オの例を御覧下さい。『蔵人補任』によれば、二人は三年間、蔵人の先輩上司、後輩部下の間柄にあったことがわかります。この三年間の蔵人の連帯意識が、二人を結びつける根底にあったと考えられます。

オ.

寛平九年（八九八）、寛平十年（昌泰元）、昌泰二年（九〇〇）

五位蔵人 源実、 六位蔵人 藤原兼茂 (『蔵人補任』)

さて、『古今和歌集目録』によりますと、実はこの後、昌泰三年（九〇一）に亡くなったことがわかります。よって、この別れは二人にとって、今生の別れになったのではないかとも考えられます。

以上の四つの根拠から、この別れは、悲しみの心情に満ちた別れだったと考えられます。続いて、『古今集』の本文異同について説明したいと思います。今回の発表目的は、古今集撰者時代の『古今集』の本文を問題にしていますので、貫之もしくは貫之妹自筆を祖本とする、三証本系統の一つである永治二年本を

中心とする清輔本を底本にしました。

また、その本文の異同を確認するために、次に挙げました諸本を校異にとりました。諸本の選択には、鎌倉期書写の三証本系統と平安期写の流布本、古筆切に限りました。高野切を始めとする古筆は、部分として残りますので、校異の有無に関わらず全てを掲出しています。

『古今集』諸本における異同

三証本系統（鎌倉期写）伊達本、貞応二年七月本、雅経本、^{（平安期写）}昭和切（昭）

流布本系統（平安期写）高野切（高）、伝公任筆本（公）、元永本（元）、筋切（筋）、唐紙卷子本（唐）、荒木切（荒）、民部切（民）、中山切（中）

※【校異】「ければ」元、筋、「けるをりに」高、昭

この歌群では、元永本、筋切は、「ければ」とあり、「をり」は脱落したと考えられます。では、これから「をり」の解釈を考えていきます。まず、「をり」の先行研究を、次の②で、発表年順に挙げましたので、御覧下さい。

② 「をり」の先行研究（注(1)）

橋本不美男「折の形成と文芸」（『王朝和歌史の研究』1972年1月、笠間書院）

辻田昌三 「『をり』と『とき』（『親和国文』第10号、1975年2月）

久保木哲夫 「『折り』の文学としての平安和歌」（『国文学研究資料館講演集』2、1981年3月）

『折』と藝と晴」（『王朝和歌と史的展開』1997年12月、笠間書院）

橋本氏は、「『折』とは、単なる「ある時」ではなく、特定の自然・時刻・事件・人人を含み、しかも時時刻刻として変化するものをも含む総合体をいうのであろう」と指摘されます。

辻田氏は、「『とき』は『をり』に比してその認識がより客観的であり、『を

り』は主観を伴った捉え方をしていると言える」と指摘されます。

久保木氏は、詠歌における「をり」について、詠まれる状況と歌の表現が密接であり、「をり」の説明がないと歌が第三者には理解されにくいことを指摘されています²⁾。

以上の先行研究のうち、「をり」は場面を中心とした状況全体を含むこと、その状況把握は主体者に拠る所が大きく、「をり」の状況と歌表現が密接な関係にあることをふまえて、以下、「をり」について考察してゆきます。

まず、『古今集』における他の「をり」を考察します。『古今集』には、今回取り上げた「をり」以外に九例あり、合計十例の「をり」がみられます。それを大きく三つの用法に分類して確認してゆきます。③を御覧ください。まず、

(1) 別れの状況に使われる「をり」が四例あります。その代表例として、力の例を御覧下さい。宮中（襲芳舎）で、貫之が兼覧王に贈答した歌です。

③ 『古今集』における「をり」

(1) 別れの「をり」

力。

かむなりの壺に召したりける日、大御酒^{みき}なむどたうべて、雨のいたう降り
ければ、夕さりまで侍りてまかりけるをりに紀貫之が盃とりて
秋萩の花をば雨に濡らせども君をばまして惜しとこそ思へ

（『古今集』巻八、別離歌、紀貫之）

【校異】「いづる」元、筋、「いでけるをり」昭、「けるをり」高

酒の宴を雨がひどく降ったので、夕方まで催して、退出しようとする状況で「をり」が使われています。よって、貫之は雨が降る中の楽しい酒の宴から、雨が上がり一変して退出しなければならない別れを惜しむ悲しさが詠まれていると考えられます。詠歌の内容も、「秋萩が雨に濡れた」ことよりも、「(雨があがって) 兼覧王と別れる」ことを惜しむ気持ちが詠まれています。ゆえに、こ

の「をり」は別れに状況における心情が働いていると考えられます。

続く、キの例では、物いひける人と貫之との別れ場面で「をり」が使われています。「物いひける人」は、当時の用例から女性を指す例で使われています。よって、ここでは、貫之のその女性に対する別れを惜しむ悲しさが、「をり」に働いていると考えられます。

キ.

志賀の山越えにて、石井のもとにて物いひける人の別れけるをりによめる
結ぶ手のしづくに濁る山井の飽かでも人に別れぬるかな

（『古今集』巻八、別離歌、貫之）

【校異】「ときに」高、公、「とき」荒、「に」元、筋、「をりに」昭

クの例は、『伊勢物語』と共通する箇所です。惟喬親王と在原業平との別れの場面で「をり」が使われます。

ク.

これたかのみこ
惟喬親王の狩りしける供にまかりて、宿りに帰りて、夜一夜酒を飲み物語
しけるに、十一日の月隠れなむとしけるをりに親王酔ひて内へ入りなむとし
とをかあまりひとひ みこま
ければよめる

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

【校異】「ければ」元 （『古今集』巻十七、雑歌上、在原業平）

ケの例は、伊勢とその元愛人であった宇多法皇との別れの場面で、「をり」が使われています。

ケ.

中務親王の家に舟を作りておろし、はじめて遊びける日、法王御覧じにおは
しまして、夕さりつかた、帰りおはしなむとしけるをりによみて奉りける 伊勢
水の面おもに浮かべる舟の君ならばここぞ泊まりといはましものを

【校異】ナシ 公、「とき」元、「をり」民 （『古今集』巻十七、雑歌上、伊勢）

以上みてきました、別れの「をり」は、源実の場合と同じように、いずれもこれから別れようとする場面に用いられています。また、歌を詠む主体者にとって、別れる相手とは親密な間柄にあり、再会が容易ではない状況だと考えられます。

続いて第二番目に、別離の状況にある場面で使われる「をり」の用法があります。コ^コの例を御覧下さい。『伊勢物語』と共通する東下りの場面です。関東に下向する業平を中心とする一行は、隅田川を前にして、京への思いが募る場面です。

(2) 別離した思いの「をり」

コ.

武蔵国と下総^{しもつふさのくに}国との中にある、隅田川のほとりにいたりて、都のいと恋しくおほえければ、しばし川のほとりにおりみて、思ひやれば、「限りなう遠くも来にけるかな」と思ひてなかめをるに、渡守「はや舟に乗れ。日暮れぬ」といひければ、舟に乗りて渡らむとするに、みな人のわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さる^{はし}をりに白き鳥のはし^{はし}嘴赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡守に「かれは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」といひけるをうち聞きてよめる
名にし負はばいざごと問はむ都鳥わが思ふ人はありやしやと

（『古今集』巻八、羈旅歌、業平）

【校異】「ざるほど」公、「ぬ」元、筋、「ず。さるをり」昭

一行はわびしく、京に思う人を残し、川の向こうへ踏み出せない一行に対して、渡守は容赦なく乗船を急かします。このように、郷愁への思いが高まる場面に「をり」が使われています。歌は、「都の名を持つ都鳥だから一つ尋ねよう、都に残した愛する人はつつがなく暮らしているでしょうか」と詠みます。そのような心情と、「都鳥」の表現とは、密接な関係にあることがわかります。

続いて、サの例は、恋人同士であった女性と逢えなくなり、大伴黒主が彼女の家を歩きまわる場面に、「をり」が使われます。

サ.

人を忍びにあひ知りて逢ひがたくありければ、その家のあたりをまかりありきけるをりに、雁の鳴くを聞いてよみてつかはしける
思ひいでて恋しき時は初雁の鳴きて渡ると人は知らずや

【校異】「をり」中 (『古今集』巻十四、恋歌四、大伴黒主)

また、シの例のでは、躬恒が久しく逢わない状態であったある人と再会して怨む場面に、「をり」使われます。注意したいのは、再会を喜ぶのではなく、久しく逢えなかったことへの怨んで、「をり」が使われている点です。

シ.

人をとはで久しくありけるをりにあひ、恨みければよめる
身を捨てていきやしにけむ思ふより他なるものは心なりけり

(『古今集』巻十七、雑歌下、凡河内躬恒)

【校異】「てあひたるに」公、「ければ、あひ」元、「けるをりにあひて」高

続いて、スの例では、同じく躬恒が、越に赴任していて宗岳大頼と再会した場面に、「をり」が使われます。注意したいのは、大頼が別れていた躬恒への思いを雪に託して、「この雪のように積もっていた」という逢えなかったことの募る思いの言葉をとらえて、「をり」が使われていることです。

ス.

^{むねをかの}宗岳大頼が^{こし}越よりまうで来たりけるに、雪の降りけるを見て、「おのが思ひは、この雪のごとくなむ積もれる」といひけるをりによみける
君か思ひ雪と積もらば頼まれず春より後はあらじと思へば

(『古今集』巻十七、雑歌下、躬恒)

【校異】「いふとき」公、「いひけるをり」高、唐

以上のように、四例とも逢えない状況における心情に使われていることがわかります。

「をり」の用法の三番目として、(3)に挙げましたはかなさを表す「をり」があります。

セの例を御覧下さい。

(3) はかなさの「をり」

セ.

世の中のはかなきことを思ひけるをりに、菊の花を見てよめる
秋の菊にほふ限りはかざしてむ花より先と知らぬわが身を

【校異】「ころ」元、筋、「をりに」昭 (『古今集』巻五、秋歌下、貫之)

世の中のはかなさの内実は、明確には示されません。そのような思いで、読んだ歌が、「秋の菊が美しく咲いている限りは、頭にかざして延命を祈ろう、花が散るより先にむなしくなるかもしれない身だから」となります。菊に長寿を願って、歌に詠むことは、ソの例が一般的です。しかし、この歌を詠んだ貫之には、何か世のはかなさを思い知ることに出会ったと考えられます。菊と死の連想から、身近な人の死別があったのではないかと、推定されます。

ソ.

延喜十四年十二月、女一宮御屏風の料の歌、亭子院の仰せによりて奉る、
十五首

咲くかぎり散らではてぬる菊の花むべしも千代の齡のぶらむ

(桃園文庫本『貫之集』巻第一)

以上のように、「をり」を三つに分けて確認してきました。そして、それら三つとも、別れを基調とした場面に用いられることがわかります。よって、『古今集』における「をり」は、別れを惜しむ悲しさと深く結びついていたと考えられ

ます。

④ 『古今集』における「とき」の用法

三証本をもとに「をり」の異同をみれば、脱落する形が最も多い。ついで、「時」に変わる例が多くみられます。そこで、次に「とき」との比較から「をり」の意味を考えていきます。④の夕の例を御覧下さい。今回取り上げた源実の詞書における「をり」をの英訳を挙げました。「をり」が「when」に訳されているように、「とき」との差の英訳が難しかったと思われま

す。

Composed when Sane told them to return home.

(Laurel Rasplica Rodd 『Kokinshu』, 1984, University of Tokyo Press)

では、『古今集』における「とき」を考えてゆきます。『古今集』(清輔本)における「とき」は、百八十例あります。それを、大きく二つに分類すれば、第一に具体的な時期を知らせる用法が挙げられます。「貞観の御時」などの治世を表す例が、四十三例あります。それ以外のものが九十四例あり、そのうち歌を詠む行為と関わる例が四十七例あります。これは、事象と行為との「同時性」を表現しています。第二の用法として、抽象的な時を表す用法です。その例として、チの例の歌を御覧ください。

「時」の用例 … 百八十例 (清輔本)

(1) 具体的な時期を知らせる用法

「御時」(貞観、寛平など) …… 四十三例

それ以外(詠む行為と関わる) …… 九十四例(四十七例)

(2) 抽象的な時を表す用法 …… 四十三例

す。

宮仕へ久しうつかまつらで山里に籠もり侍けるとときによめる

奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光みるときなくて

(『古今集』巻第五、秋下、藤原関雄)

世に栄達する比喩として、「照る日の光みるときなくて」とあり、この「とき」は自分が栄える時期を意味し、抽象的であり主観的に「とき」を把握しています。このように、抽象的な「とき」を表す用法は、歌の中で使われる傾向があります。

では、「をり」と「とき」の用法を比較してゆきます。

⑤ 「をり」と「とき」との比較

ツの例を御覧ください。冒頭で取り上げました源実の歌群の詞書です。ここでは、発話内容を「をり」で受けて、歌を詠む形式になっています。これと同じ形を、テの例に挙げましたので御覧ください。

ツ.

「今はこれより帰りね」と実がいひけるをりによみける
慕はれて来にし心のみにしあれば帰るさまには道もおぼえず

(『古今集』巻第八、別離歌、兼茂)

テ.

「歌奉れ」とおほせられしときによみてたてまつれる
桜花咲きにけらしもあしひきの山のかひより見ゆる白雲

(『古今集』巻第一、春歌上、貫之)

ここでは、「歌奉れ」という発話内容を「とき」で受けて、歌を詠む形式になっています。形式の面では、ツの例と同じです。しかし、それぞれが受ける発話内容と歌の内容との関係に違いがあります。ツの例では、「をり」が受ける発話内容の「帰りね」に対応して、歌の「帰るさまには道もおぼえず」が詠まれています。それに対して、テの例では、「とき」が受ける発話内容の「歌奉れ」

と、詠まれた「桜花」の内容は一致していないという違いがあります。よって、「をり」と「とき」との働きの異なっています。つまり、「をり」は歌の心となる状況に着目し、「とき」は事柄の同時性に着目しています。ゆえに、「をり」「とき」との異なりは、状況のどの部分に着目するかによって使い分けられていると考えられます。

では、「とき」が歌の心と密接な関係となる表現をトの例に挙げましたので、御覧下さい。業平の臨終の歌です。

ト.

病して弱くなりけるときよめる

つゝにゆく道とは聞きしものなれど昨日今日とは思はざりしを

(『古今集』巻第十六、哀傷歌、業平)

ここでは、詞書の「とき」が、歌に詠まれる自身の死期が、「昨日今日」とに来るとは思わなかったという、死期の到来と痛切に響いています。

では、続きまして「をり」の語を考察してゆきます。まず、⑥の「をり」の仮名表記を御覧下さい。先に考察に校異をとりました『古今集』の三証本系統、平安期書写のものは、「をり」の表記が全てかなになっています。また、貫之自筆の『土左日記』を忠実に伝えるとする青谿書屋本『土左日記』、及び十一世紀後半の『藤原為房妻書状』にみえる「をり」も全て仮名表記となっています。よって、平安期の「をり」は、仮名で表記されおり、特定の漢字とは結びついていなかったことがわかります。

⑥ 平安期写本における「をり」のかな表記

青谿書屋本『土左日記』、十一世紀後半『藤原為房妻書状』

では、次に「をり」が特定の漢字の訓読語となる現象に着目し考察してゆきます。⑦を御覧下さい。十一世紀の凶書寮本『類聚名義抄』法に部分的に残存

しています。そこには、「境」の字の訓読語として、「サカヒ」「カギリ」「ヲリ」があります。

⑦ 「境」からみる「をり」

十一世紀、図書寮本『類聚名義抄』法

境 サカヒ カギリ ヲリ

また、平安末成立の『色葉字類抄』の黒川本は近世書写なので、後世部分が含まれていますが、「境」の訓読語の始めに「をり」があります。

平安末期、黒川本（近世期写）『色葉字類抄』巻中、天象^付、辞字^付

境_{オリ} 節_同 折_同 折_{ヲリ} 境_{オリ}
(天象^付) (辞字^付)

以上のように、平安中期には、「境」を「をり」と訓読していることから、「境」と「をり」には語義の重なる部分があると考えられます。

「境」の語は、大乘仏教における唯識思想の概念として使われます。その唯識系の流派の一つに、天台宗があります。天台宗の根本經典として、『法華経』の注釈書である天台三大部がその注釈書と共に、隋代以来広められます。隋代の智顛によって、止観という対象に精神を集中させて分析する修行が生み出されます。その止観の対象となる現実世界が境にあたります。止観が説かれる『摩訶止観』を挙げた、ナの例を御覧下さい。

天台三大部（『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』）「十境」

ナ。

窮_{ツケテ}諸法源_ニ、皆由_ニ意造故以_テ、意為_ル言端_ト。対_シ境_ト、覚知異_レ乎木石_ト。
名為_ル心。次_ニ心籌量_{スルヲ}、名為_ル意、了了別_{ケテ}知名為_ル識。(中略)心意識非_レ一_ニ故立_ス三名_ト、非_レ三_ニ故説_ス一_ニ性_ト。

(隋、智顛説、灌頂記『摩訶止観』巻第二上)

「ものごとの根源を窮めてみると、意によらないものがないので、まずこの意から修行を始める。境に対して知覚する働きは木石とは異なるので、これを「心」と名づける」とありますように、止観と「境」は密接な関係にあります³⁾。

この「境」の概念について、二の例に挙げました、小島憲之氏の解説を御覧下さい。

二.

物象即ち対象物の存在する客観的世界が、この「境」であり、それは、自己の中に存在する主観的世界即ち「心」に対応する。対応すると云っても、「心」を通して見る「外」が「境」であらう。

小島憲之「弘仁期の詩（二）—僧家最澄をめぐる文学交流—」（『国風暗黒時代の文学—弘仁・天長期の文学を中心として—』所収、1985年5月、塙書房）

心象世界を意味する境の概念は、この中国で起こった天台宗を中心として、唐代文学にも受容されます。その一例として、王昌齡の例を又に挙げました⁴⁾。

又.

夫置_レ意_レ作_レ詩、即須^{クシ}凝_レ心_レ目_レ擊_レ其物_レ。便^{すなはち}以_レ心_レ擊_レ之、深穿^{うがッ}其_レ境_レ。
如_レ登_レ高山絶頂_レ、下臨_レ万象_レ、如_レ在_レ掌中_レ、以_レ此見_レ象、心中了見^{あきらかに}。
当^{リテ}此即用、如_レ無_レ有_レ不_レ似。

（盛唐、王昌齡『詩格』〈空海『文鏡秘府論』南卷、論文意）

境の概念、最澄、空海らによって、平安初期の日本に注目されます。空海は、唐代の文学理論としても普及させ、又に挙げました『文鏡秘府論』にもみえます。では、空海自身の文学における「境」の使用の例として、ネの例を御覧下さい。

ネ.

空海「沙門勝道歴^{ヘテ}山水^{みがク}瑩_レ玄珠_レ碑并序」
夫境随_レ心变、心垢則^{けがルレバ}境濁。心逐_レ境移、境閑則^{しづかなレバ}心朗。心境冥会、道德玄存^{ほがらかなリ}。
（『性靈集』卷第二）

このように空海もまた、「心」によって、「境」が変わるという、両者の密接な関わりを述べています。また、ノの例を御覧下さい。最澄の臨終の詩に唱和した作です。「境」と「空」を会わせて詠み込んでいます。

ノ。

嵯峨天皇「和_レ澄公^ガ『臥_レ病述_レ懷^{こころヲ}』之作_一、一首」

对_レ境_一 知_レ皆幻_一、観_レ空_一 厭_レ此身_一。 (『文華秀麗集』巻中、梵門)

ハの例を御覧下さい。同時代の小野篁の作が『倭漢朗詠集』に収録されています。平安後期には、『倭漢朗詠集』の注釈書が作られました。その中で、『朗詠江注』や『和漢朗詠註抄』の写本には、「境」が「オリ」と訓読されています。

ハ。

小野篁（『倭漢朗詠集』僧）

明鏡^{たちまちニ}乍_レ開_レ随_レ境_一照、白雲不_レ著_レ下_レ山_一来。

（『朗詠江注』（貞和本、室町期写）、『和漢朗詠註抄』（黒木文庫本、鎌倉中期写）

以上のように、唯識の「境」は、「心」を通してみた世界を意味します。その「境」に「をり」が訓読語となる背景には、「をり」に主体者の心が働いていると考えられます。つまり、「をり」は主体者の心象世界の把握を意味していると考えられます。

では、続いて「をり」を訓読語にもつ「節」の語を考察してゆきます。

⑧ 「節」からみる「をり」

院政期に書写された、図書寮本日本書紀には、「節」の語を「をり」と訓読する例が二例あります。ヒの例を御覧下さい。「季冬之節」を「しはすのをり」と訓読しています。ここで注意したいのは、その後が続く箇所表現です。風が烈しくて寒く、水が凍って大中姫が死にそうになっている厳しい状況が示され

ます。このように、「節」の語を「をり」と訓読する場合には、寒さの厳しさが明確に表れる状況だと考えられます。つまり、事象の本質が明確になる状況に、「をり」と訓読されるといえます。

ヒ.

当_レ于_レ此時^{シハスフユノヲリ}季冬之節、風亦烈寒。以大中_レ姫所^{かなまりノ}捧_レ鏡水、溢而腕凝、不堪_レ寒以_レ将_レ死。

(図書寮本(院政期写)『日本書紀』卷第十三、允恭紀、元年十二月)

もう一つの例は、フの例を御覧下さい。ここでは、音楽の一節、一節を、「をり」と訓読しています。よって、「をり」は一つのまとまりとしてみる意があることがわかります。

フ.

寿畢、乃赴_レ節歌^{コトノヲリニアハセテ}曰(下略)(図書寮本『日本書紀』卷第十五、顯宗紀、即位前紀)

では、ヒの例の用法について考察してゆきます。『日本書紀』と同じく厳しさの本質が表れる状態として、への例を御覧下さい。

へ.

凝霜銀鏡作_レ節、露杼錦葉織時、云々。(奈良末期『東大寺諷誦文稿』)

かたまった霜が銀鏡となる状況を「節」が受けています。霜が表れる状況に「節」が結びついています。

本質を表す「節」の用法として、木の例を御覧下さい。ここでは、釈迦の説法の本質を「樹」の「節」として表しています。

木.

願説_レ樹節。(後秦、仏陀耶舎、竺仏念『長阿含經』散陀那經)

マの例は、弓である弩を引いて力をため、矢が飛び放つ瞬間を「節」と表し

ています。このように、「節」には、ある状態から状態へ移行する部分を意味があります。

マ.

水之疾、至_二於漂_一石者、勢也。驚^{してう}鳥之擊、至_二於毀折_一者、節也。是故善戦者、其勢險、其節短。勢如_レ驥^{ひクガ}弩、節如_レ発_レ機。 (『孫子』勢篇)

以上のことから、「節」の語を「をり」と訓読する場合には、事象の本質が明確になる状況であることがわかります。

では、次に類義語の観点から「をり」の語義を考察してゆきます。) ⑨の『土左日記』の例を御覧下さい。

⑨ 『土左日記』における「をり」「をりふし」

かく別れがたくいひて、かの人々のくち網も諸持ちにて、この海辺にてになひいだせる歌 (中略)

といふあひだに、楫取りものあはれも知らでおのれし酒をくらひつれば、早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわけば、舟に乗りなむとす。このをりにある人々をりふしにつけつつ、からうたどもときに似つかはしきいふ。

(紀貫之『土左日記』十二月二十七日)

土左から都へ向けて船出する場面です。在地の人達との別れが描かれています。『土左日記』には「をり」と「をりふし」の語が一例ずつあり、この別れの悲しみの場面に用いられています。そして、先にみました『伊勢物語』の東下りの場面と類似の構成で表現されています。「をりふし」の語は「をり」と合わせて使われるので、類義の語だと考えられます。

では、なぜ「をり」と「ふし」が結びついて「をりふし」となったのでしょうか。ミの例に「ふし」が詠み込まれる歌を挙げましたので、御覧下さい。

⑩ 「をりふし」からみる「をり」

躬恒が幼い我が子に対して詠んだ歌です。

三.

もの思ひ侍けるとき、いとけなき子を見てよめる
いまさらになに生ひいづらむ竹のねの憂きふししげきよとは知らずや

(『古今集』巻第十八、雑歌下、躬恒)

ここでは、世の中の比喩として、竹を用いています。竹の「ふし」の部分をつらい出来事とし、「ふし」と「ふし」との間の何もない「よ」の部分、平穏な世の中に例えています。このように、「憂し」と「ふし」が結びつく例が、他にも『古今集』にあります。よって、当時は「ふし」のような何かが起こる状況をつらい出来事とする連想があったことがわかります。よって、「ふし」は、別れの悲しみに使われる「をり」と、類義語として結びつくと考えられます。

△の例では、「をりふし」が「時節」の訓読語となっています。その理由は、括弧内に挙げましたように、皇帝の命で地方の下向しなければならなかった主人公の嘆きを、訓読者が汲み取ったと考えられます。

ム.

一種天公、^{ヲリフシナリ}両般時節、(下略) ^{ちやうさく}初唐、張?『遊仙窟』(醍醐寺本(鎌倉期写)、他)
(僕從^{けんろう}? 隴^{ちゆうんてん}、奉^{べうばくヲ}使河源^{ちゆうんてん}、嗟^{べうばくヲ}運命之^{ちゆうんてん}迤邐^{ちゆうんてん}、歎^{べうばくヲ}郷関之^{ちゆうんてん}眇邈^{ちゆうんてん})

メ.

節 フシ カギル 両一間 ヨ 時— ヲリフシ

(観智院本(鎌倉期写)『名義抄』僧上七七)

「時節」が「をりふし」と訓読された、もう一つの理由として、「節」の語が「をり」と「とき」の訓読を使い分けていたことが挙げられます。図書寮本『日本書紀』には、「節」の語を「とき」と訓読する例が、二例あります。モとヤの

例を御覧下さい。

⑪ 「節」と「とき」

モ.

慰問慰勲、賞禄優^{トキ}節。(図書寮本、前田本(院政期写)『日本書紀』卷第十七、継体紀、十年五月)

ヤ.

従^レ春至^レ秋、農桑之節。不^レ可^レ使^レ民。

(図書寮本、岩崎本(寛平、延喜頃)『日本書紀』卷第二十二、推古紀、十二年四月)

モでは、褒美が常よりも豊かであること、ヤでは春から秋までの期間を指すことが、それぞれ「節」の語が「トキ」と訓読される理由になったと考えられます。よって、図書寮本『日本書紀』における「節」の訓読には、「をり」と「とき」の使い分けがあったことが分かります。

ユ.

時 トキ 節 已上同 (前田本(平安末期写)『色葉字類抄』卷上、天象付、名字付)

節 トキ フシ (観智院本『名義抄』僧上四八)

続きまして、「をり」を訓読語に持つ「境」「節」の語の共通性に着目します。先に⑦に挙げました図書寮本『類聚名義抄』に挙げました「境」の語には、「カギリ」の訓読語がありました。また、メの例に挙げました観智院本『類聚名義抄』には、「カギル」の訓読語があります。よって、「境」「節」の訓読語となる「カギリ」「カギル」が、「をり」と共通性を持つことが考えられます。では、「かぎり」と「をり」の語義の共通性を考察します。「かぎり」が詠まれた歌を、⑫に挙げましたので御覧下さい。

⑫ 「かぎり」からみる「をり」

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける

(『古今集』巻第四、秋歌上、読人しらず)

この歌では、「かぎり」が上接する状態が極限まで高まる状態を形式名詞として表しています。よって、「をり」も別れの直面向かう状況、別れの悲しさが募る状況を表していると考えられます。また、「かぎり」と「をり」との差異には、「かぎり」は上接する状態の高まりを表すのに対して、「をり」は上接する状態を中心として、全体を一つの状況世界ととらえる点が異なると考えられます。

⑬ 『竹取物語』における「をり」

では、最後に『古今集』撰者達と同時代の例として、『竹取物語』の「をり」を確認します。ヨの例を御覧下さい。

ヨ.

(竹取の翁)泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。(かぐや姫)「文を書き置きてまからむ。恋しからむをりをり、取りいでて見たまへ」とて、うち泣きて書く言葉は、(下略)

(天正本『竹取物語』)

ここでは、かぐや姫が昇天した後に残された竹取の翁が、かぐや姫への別離の悲しみが募る状況を表しています。ラの例を御覧下さい。

ラ.

(天人はかぐや姫に) 御衣を取りいでて着せむとす。そのときに、かぐや姫、「しばし待て」といふ。「衣着せつる人は、心異なるなりといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。(中略)

(手紙の文面) かくあまたの人を賜ひて、とどめさせたまへど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつ

らずなりぬるも、かくわづらはしき身にてはべれば。心得ず思しめされつら
めども、心強くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しめしと
どめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる。とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ 君をあはれと思ひいでける

(天正本『竹取物語』)

ここは、かぐや姫が人間の心を失ってしまいますとされる天の羽衣を着る直前の
場面です。かぐや姫が帝に対して詠んだ歌の中に「をり」が使われます。よっ
て、『竹取物語』の「をり」も別れの悲しみをとらえていることがわかります。
では、これまでの考察をまとめます。⑭を御覧下さい。

⑭ まとめ

「境」 状況の変化を認識することで、意識に立ち現れる心的世界。

「節」 事象のくぎりを認識し、変化する事象の本質が明確になる状況。

まず、「境」との重なりから、「をり」には、「状況の変化を認識することで、
意識に立ち現れる心的世界」の意を持つと考えられます。

また、「節」との重なりから、「をり」には、「事象のくぎりを認識し、変化する
事象の本質が明確になる状況」の意を持つと考えられます。

この二つの語義に合わせ、「をりふし」「かぎり」の考察をふまえて、「をり」
の語義をまとめます。

「をり」は、事象をとりまくおほろげ臆気なはるけさが退き、事象の本質が定かに立
ち現れる局面を示す。それは、主体者の心的世界が変易する局面と表裏をなす。
古今集撰者の時代では、惜別の局面に使われる傾向がある。

以上の「をり」の考察をふまえ、冒頭に挙げました源実の歌群の解釈に戻り

たいと思います。①にお戻り下さい。この歌群は、別れの状況を示した山崎に始まり、神奈備の森を経て、源実の言葉によって、別れを迎えるという構成になっています。「をり」の語が、最後の詞書で使われたのは、「今はこれより帰りね」という実の別れの言葉を、別れの最後と痛切に受けとめた心情が示されています。よって、この「をり」は、ここに別れの局面を明らかにさせた、兼茂の心象世界が生み出した局面であり、兼茂の悲しみの心情を込める試みの表現であったとわかるのです。

このように、『古今集』撰者らによる和語「をり」の使用は、かな文学に心象世界の表出を試みる挑戦だったと考えられます。また、それを支えたのは、平安前期に興隆した天台宗が、平安文人に拓いた精神面にあったと考えられます。

【参考】 「をり」の用法の拡大

では、参考として、『古今集』撰者の時代以降の「をり」の用法の拡大について述べたいと思います。『古今集』撰者の時代の「をり」は、別れの悲しみに使われる傾向があると指摘しましたが、『竹取物語』には、「をり」が受ける対象の拡がり確認できます。リの例を御覧下さい。つばめが子を産む時に表れる子安貝が話題となっている場面です。

リ、

中納言、くらつまろにのたまはく、「つばくらめは、いかなるときにか子うむと知りて、人をば上ぐべき」とのたまふ。くらつまろ申すやう、「つばくらめ子うまむとするときは、尾を捧げて、七度めぐりてなむうみ落とすめる。さて七度めぐらむをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせたまへ」と申す。(天正本『竹取物語』)

つばめが子を産む時の、七度めぐるという特徴を「をり」が受けています。ここでは、別れや悲しみといったものとの関係ありません。しかし、事象の本質が立ち表れるという点では共通しています。よって、この例は、「をり」の比較

的新しい用法ではないかと考えています。

このような「をり」が受ける対象の広まりは、『伊勢物語』を通して確認できます。『伊勢物語』にも、別れの悲しみと関わる例と関わらない例とが含まれるからです。現在の代表的な『伊勢物語』である定家本『伊勢物語』では、「をり」が四例、「をりふし」が一例使われています。

片桐洋一氏が指摘されるように、『伊勢物語』は、大きく三段階の増補を経て成長して現在の形となっています。よって、その成長段階に沿って、「をり」の例の分布を考えます。

まず、第一次『伊勢物語』は、『古今集』と共通する段が基盤となります。本発表の『古今集』のクの例が、『伊勢物語』の第九段にあたります。よって、「をり」「をりふし」の残りの例は、『古今集』成立以後の例となります。

さらに、第二次『伊勢物語』は、雅平本『業平集』と尊経閣本『在中将集』の歌と共通する段が基盤となり、十一世紀の『拾遺和歌集』以前の成立と考えられます。八十一段が第二次の増補にあたります。ルの例に挙げましたので、御覧下さい。

紅葉が色づく状況を「をり」がとらえた例です。しかし、傍線部の部分は、歌集の段階にはありません。よって、第二次『伊勢物語』の成立の段階に増補されたと考えられます。また、定家本以外塗籠本の系統の本文では、「紅葉」が「木草」、「をり」が「頃」となっています。よって、「をり」は定家本系統にみられる使用だといえます。ゆえに、この「をり」の用法は、『拾遺集』成立以降の新しい用法だと考えられます。

また、「をり」が歌句として使われる二例も、第三次『伊勢物語』からみられますので、歌句として「をり」を用いるのも比較的新しい用法だったと考えられます。この事が、『竹取物語』の「をり」の用法が比較的新しいのではないかと考える理由となっています。

定家本『伊勢物語』（三条西家旧蔵本）

「をり」 …… 九、十三、八十一、一二四段

「をりふし」 …… 五十五段 【□は和歌での使用を示す】

片桐洋一「伊勢物語成長論序説」（『国語国文』第26巻第10号、1957年10月）

第一次『伊勢物語』（『古今集』と共通） …… 九

第二次『伊勢物語』（十一世紀『拾遺和歌集』以前） …… 八十一

雅平本『業平集』（書陵部本『業平集』〈『三十六人集』所収）

尊経閣文庫本『在中将集』

ル.

十月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、もみぢのちぐさに見ゆるをり、
（三条西家旧蔵本『伊勢物語』八十一段、「塩竈」）

【校異】「本草の色ちくさなるころ」伝民部卿局筆本（塗籠本）

このようにして、「をり」は『古今集』撰者の時代以降、受ける対象を広め、使用も増えていきます。その過程で、「をり」そのものには、別れの悲しみと結びつく特徴もなくなってゆきます。そのことがわかる例として、レとロの例を御覧下さい。『源氏物語』には「をりよし」と「をりあし」という複合語が使われます。レの例では、手持ちぶさたの源氏へ訪問客があったことを、ロでは、柏木が亡くなったことを、「をり」が受けています。『源氏物語』が成立した十一世紀には、「をり」自体には、よきもわるきも含まず、両方に結びつくようになったことが確認できます。このような用法の拡がり和使用の頻度の増加が、「をり」と「時」とが交替する異同が起こる背景になったのではないかと考えています。

レ.

例の、大殿の公達、^(夕霧)中將の御あたり尋ねてまゐりたまへり。「さうざうしくねぶたかりつる、をりよくものしたまへるかな」とて、^(源氏)（下略）

（大島本『源氏物語』常夏）

口。

「^(夕霧)いかなることにかありけむ、すこしものおぼえたるさまならましかば、さばかりうちいでそめたりしに、いとようけしきばみてましを、いふかひなきとぢめて、をりあしういぶせく、あはれにもありしかな、(下略)

(大島本『源氏物語』 柏木)

[注]

- 1) 神奈備の森が山崎の西にあったことは、増田繁夫氏の論に詳しい。
(『古今集の歌枕—音羽山・神奈備の杜・立田川—』《『王朝和歌と史的展開』1997年12月、笠間書院》)
- 2) 橋本氏は、平安中期の『大斎院御集』『枕草子』を中心に考察され、『折』とは、単なる「ある時」ではなく、特定の自然・時刻・事件・人人を含み、しかも時時刻刻として変化するものをも含む総合体をいうのであろう」と指摘されます。
辻田氏は、平安前期から後期までの作品を考察され、『をり』と『とき』とは、その指し示す「時点」の認識が異なるものだと見得る。『とき』は『をり』に比してその認識がより客観的であり、『をり』は主観を伴った捉え方をしていると云える」と指摘されます。
- 3) 平安朝における『摩訶止観』の受容は、以下の書にみられる。
具平親王『弘決外典抄』(中唐、湛然『摩訶止観輔行伝弘決』の注釈)、藤原公任『倭漢朗詠集』、『源氏物語』、藤原教長『古今集註』
- 4) 唐代文学への受容は、他に盛唐、僧皎然『詩議』にもみられる。
盛唐、僧皎然『詩議』

* 討議要旨

相田満氏は用例に挙げた古今集の歌の校異で、諸本によって「時」と「折」の異同があることについて、より詳しい説明を求めた。発表者はそれについて、理由として場面の設定がはっきりしている場合は異同がおきにくく、場面の設定が分かりにくいものに関しては異同がおきているのではないかと答えた。また異同の多い元永本の場合は、本の性格が文字の観賞用のものであったことと、詞書が比較的自由に書かれているものであるため異同がおきたということを指摘した。

横井孝氏は、先行研究と比較した、発表者の論の独自性はどこかと質問し、発表者は、先行の「折」がある時点を指すのではなく状況全体を指すとする論、「折」という語に主体者の心理面が働くという論を踏まえた上で、どうして心情面が「折」という語に関わるかということの理由が、平安前期以降の文人の精神面、思想が現れているということによるということと、世界を認識するとき、世界を一様に捉えるのではなく、別れの局面を独自に取り出せるのではないかということが発表者の独自性であるとした。